
勝手に飛んで異世界デイズ

東雲八波

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勝手に飛んで異世界デイズ

【Zコード】

Z0396Z

【作者名】

東雲八波

【あらすじ】

気づいたらそこは異世界だった。なんでそんな簡単に言えるかと言つたら、頭の上をドラゴンが通過しているからですが、何か異論はござりますでしょうか！

俺こと椎橋佑は、いつの間にやら高校の先輩である宵原良人（男である。ロマンスも何もない）と異世界にいた。とりあえず人を探すために歩いていたら、なんと、凄い可愛い女の子に出くわしたのである。

「あ

と、言つたときにはもう遅い。風によつてスカートはめぐれ上がり、パンツが見えて、その後はなんか魔法でボロボロになつてしまふ。

なんだか散々なことになりそつだ　　と、これは本当に始まりの始まりに過ぎなくて、俺を待ち受けていたのは散々すぎて塵芥になりそうな痛々しい現実であつた。

笑いと涙と戦闘と！　最強存在（俺じゃないけど）と美少年美少女と化け物がわんさか出てくる若干えつちい（俺は紳士である！）ファンタジー！

プロローグ

「おーおー、まさか小説家になろうに掲載されている小説じゃあるまいし……」

異世界。そういう単語は知っている。どちらかといつと、パラレルワールドという意味合いよりかは次元的な意味合いで、俺が生きてきた地球。ひいては宇宙とか、そこらへんとは何ら関係なく存在する、別世界のことを指すことくらい、高校一年生の俺なら知っている。

もちろん、知っているからといって、素直に異世界の存在を認めるかつて訊かれたら、そりや、地球に在住の方々なら口を揃えて認めないというだろ。頭が現実よりも夢のほうにいつてしまいがちな、アレな思想の方々や、科学的に考えて異世界は存在すると妄言を主張し妄信する偉大なる先生方ならともかく。

あ、既にわかるかもしれないが、もう俺はそちら側の人間じゃないらしい。いや、なぜって俺も現在必死に辻褄あわせを考えているところなんだが、これがもう、八十年代九十年代のアニメや漫画にありがちなくらい、異世界つぶりのあるところに俺が今、いるからである。

再ブームが来てるらしいよな、異世界。市販されている文庫の小説だろうがネット小説だろうが、異世界にとんでいつてドンパチやるつて、ありふれているような気がしてならないもんな。
ところで神さま、そんな現状に一石を投じるがごとく、俺をその異世界に放り込んだのはなぜなんでしょうか。

現在、俺の真上にはどこまでも続いているみつに感じられる、それはそれは清々しい青空が広がっていた。

いやまあ、それくらいだつたらいいんだ。ちょうど地面は気持ちの良さそうな芝生だし、太陽もぽかぽかしていて気持ちがいい。そよ風がどこからか吹いていて、小鳥のさえずりも聞こえるのだから、もう横になつて寝てしまいたいくらいだ。

もしかしたら、寝れば夢は覚めるかもしれないしな。

小鳥のさえずりが聞こえる。

うん、小鳥が飛んでいるのはいいんだ。平和的だしな。

結構田舎っぽい雰囲気があるけれど、他にヘリコプターや飛行機ぐらいだったら、飛んでもまあ許そうじゃないか。

しかし、伝記にでも出てきそうつな、ドラゴンめいたものが飛んでいるのはどうしたことだ？

というわけで、ときどき、本当にときどきだが真上をドラゴンが通過する。

ときどきひとことはつまり、ときどきであることを実感できるぐらいの長い時間、俺たちは呆気に取られていた。

「……これはなんかもう、笑うしかないよねえ。さすがの僕も、こんな面白おかしく頭のおかしそうな世界に放り込まれたら、思わず踊り狂っちゃいそうだよ」

「…………一人で踊つてろよ」

それでドラゴンがアンタに目をつけても俺は知らないからな。

俺の隣には、俺と同じくこの異世界に飛ばされた青年（俺が高校一年生で、この人 宵原良人よのはら ようじんが高校三年生だ。年が一つ上ということである）がいた。

凄いというか、いつも以上にいい笑顔を浮かべていた。

カメラを向けられて「笑つて~」と言われても言われなくても、普段から似たような笑顔を顔面に張り付けて生きているような男。

それが宵原良人という人物である。

高校生にしては長めの黒髪が、吹く風に呑わせてなびく。そのたびに太くもなく細くもない眉が現れ、半眼の瞳も見え隠れする。低くもなく高くもない鼻の下には、皮肉そうに歪められたしかし美しく歪められた唇があつた。

整った顔面をしていらっしゃる宵原は、俗に言うイケメンである。背も高く、一八〇センチメートルくらいはあるんじゃないだろうか。体型もきゅっと締まつたいて、決して筋肉質ではないものの、骨と皮でできているようなひ弱な印象もない。

その宵原だが、服装が学ランだつた。俺と同じ学校の人物だから、そりや、予想の範囲外ではないのだが、しかし、ドラゴンが飛び交うこの空間では、あまりに不釣合いな服装である。

対して俺は、私服。パークーとジーパンという、自分でもあまりイケてないと感じる、二流のファッショニスタイルであつた。

ところで、俺がここで意識を確立したのは、確か午後八時ごろに意識を失つて、初めてじゃないだろうか。

すると、この人はおそらく、午後八時まで制服で過ごしていたのだろう。学ランの神様は大喜びするんじゃなかろうか。感無量、とか言つて。

話を戻そう。

この世界、ドラゴンが上空を旋回しちやつたりしているところ以外は、今のところ普通の俺たちの住んでいる地球とはほとんど何も変わらなかつた。ほとんどどといふのは、車がないのだろうか、空気が綺麗でおいしいとか、そういう当たり障りのない程度のことしか、変化が感じられないのである。

……いやいや。

ドラゴンつて。

ゲームとかで得られる知識と言えば、炎を吐くとか、空を飛ぶ

とか、異常にでかいとか、人を食うとか それこそファンタスティックなものばかりである。現実になさそつた、そんな特徴ばかりがドラゴンの特徴で つまり。

現実に見えると、ドラゴンさん、マジぱねえ。
首が痛くなるほどに見上げないと見えないくらい、高く飛んでいるのに とても大きく見える。しかもなんか炎吹いてる。翼でバツサバツサやつてる。

「なあ、宵原。あれ、どう見るよ って！ なんでノリノリで踊つてんだよアンタ！」

「いや、ほら、キミが一人で踊れつて言つたんじやない」

「言つたけどなあ！ 踊るなよ！」

たぶん頭の中で曲に合わせて踊つているのだらう いくつかの法則とある程度のリズムで、宵原は気持ち良さそうに踊つていた。マイクを持たせたら歌いだすんじゃないかと思えるくらい。

今さらながら、踊る発言が冗談でなかつたことに気づき、とりあえずやめさせる。

「もつちよつと緊張感を持たねえもんなのかよ、普通」

「普通、こんな世界にぶち込まれたら緊張感も何も持てないと僕は思つただけど キミはちよつと、落ち着きすぎなくらいだ。もつとシャウトしてもいいんだよ」

「見つかるわ！」

まあ、今でもドラゴンに見つかっていないとは限らないけど……。
俺は空を指差した。指差した方向にドラゴンはいないが、事足りるだろ？。

「あんなもんが飛んでるくらいだ。とつあえず、タイムマシンを探

すべきだとは思わないのか

「前言撤回。もう少し落ち着こうね、椎橋ちゃん」

そもそも時間の問題じゃないと想つ

と、宵原は言つ。

椎橋ちゃん、と宵原は俺のことを呼んだが、俺の名前は椎橋佑で立派な男である。問題があるのは宵原の人の呼び方のほうで、男女構わず苗字の後ろに『ちゃん』をつけるのだ。……俺の名前や容姿からして女に間違われやすいのだから、勘弁してほしい。

「最初に言つたけど、まるで小説家になろうに掲載されている小説みたいな世界なんだよ。知ってる？ 小説家になろうっていう小説

投稿サイト

「知らん

「そう。まあいいや

「いいのかよ！」

「とにかく、僕はこれに似たような世界を知っている。こりう世界には大抵、奇妙な生物がいる代わりに魔法使いとかがどつさりいるわけさ。そうしないと、物語は成り立たないだろ？」

「ずいぶんとメタな発言だな」

「僕らは物語の世界にいるわけじゃないからともかく、人間がいないということもないかもしれない。ここでドラゴンの餌になろうとするのは気が早いぜ」

「むしろ率先して餌になろうとしてたのはアンタじゃないだろ？」「

というわけで、行動開始。

一応手持ちの道具の中でも、携帯電話はまったく使い物になりそうにないことがわかった。時間も明らかにずれてるわ、電話を掛けても圏外だわ、ツール機能などしか役に立ちそうにない。なので、電源を切つておいた。何しろ、充電できないのだ。いざ明かりが必要になったときに、まったく使えなくては困る。

「まるでサバイバルゲームみたいだね」

黙つてろ。

宵原の携帯から俺の携帯にメールを送る試みもしたが、当然ネットワークがない以上こちらの携帯に『届く』とはなし。本格的にこの世界は異世界らしいな。

とりあえず、宵原の言つとおりに、まずは人を探すことにする。辺りを見渡して、草原と山が周りにあることを確認して、町や村がないことはわかつた。

ここからは、力尽きるまで時間との勝負である。

「とりあえず、歩くか」

「賢明な判断だね。乗り物も道具も食料も何もないこの状況で、誰かが来るのを待つなんて選択肢はまずない。ドラゴンが上を飛んでいるわけだし。問題は」

問題は、この何もない原っぱの上で俺たち一人が動いていると、見つかることあることだ。

見つかれば、知能がないであろうドラゴンにぱくつといわれるのは間違いない。

ただ、だからと言って、何もしなければ餓死して土の肥料となるか、やはり見つけられてぱくつといわれるかのどっちかだ。

どちらにしろ どうしたって死ぬのである。

唯一の希望は、だから人を探すことだ。ドラゴンがいるんだから、魔法云々はともかくとして、人がいればドラゴンから逃れる方法があるはず。そうすれば、一時的に助かるはずだ。

歩く。

とにかく歩く。

一時間も一時間も、

何も会話せずに、何も考えずに歩いていた。最初、俺たちのいた地点で山が近くに見えなかつた方角（見えることは見えるのだが、それは地平線の向こうにあるように見えていた）に向かつてずんずん進む。

こつの間にか、ドラゴンたちは遠い向こうにいた。
どうやら、あそこ一帯はテリトリーらしい。俺はときどきと述べたが、なんだ、遠くで見れば、出発地點の上空にしかドラゴンがない。

しかしどうして　俺は、こんな状況にあるのだろうか。
夢？

そうかもしねないが、だからなんだとこつ話。夢なり夢で、ひとつと解決に向かいたい。
まあ、土を踏んだり、風が触れる感覚がリアルすぎるから、夢とこつことはないんだろうけど。

ならばなおさら、俺はドラゴンがいるような世界にいるのだろう。意識を失つたことは覚えている。
それ以外のことは覚えていない。

いや、最後に時計を見たとき、針は八時を差していた。なぜだろうか、それは覚えているのに、気を失う前に何があつたのか、気を失つた後に何があつたのかがまったくわからない。

「椎橋ちゃん。僕たちひづれに立ってるのか、わかるかい？」

俺が考へてゐると、ピンポイントに宵塚が訊いてきた。

わからぬ。

そう答える。

「そうだろうね。僕もわからない。何がどうして、僕らはここにいるんだろうね。……実を言うと、『氣を失う』前の行動もわからなかつたりする。覚えてないわけじゃなくて、わからない。忘れたわけでもなくて、わからないんだよ」

「それがどうしたんだよ。だからなんなんだ」

俺は宵原のほうを見ずに、耳だけを、後ろを歩く宵原に向けて少々足早に歩く。

「いやね、もしかしたら、記憶を消されてるのかもしないよ、僕たちは。たぶん、僕とキミは同じ場所にいなかつただろうからまったく推測だけど、何者かが僕たちの前へ、当然別々に、現れたんじゃないかな。気絶させて、こちら側に僕らを送つて、記憶を消した」

面白い推測だが、本当に推測だな。この世界よりも夢物語じゃねえか。

「そうだね。だけど、夢物語こそ今は有力だ。早計かもしないが、僕たちの目的は、人を見つけることじゃないよ」

元の世界に帰ることだ　宵原は妙に落ち着いた声でそう言った。
その推測が当たりなら、その人物を見つけることだが　。
俺は体を宵原に向けて、後ろ歩きで前をいく。

「やつぱり早計だな。いないかもしない奴を探すのは無理だ」
「ま、そうだね。ところで椎橋ちゃん、前を見て歩こうぜ」

あ？

振り向いた。

別に、前に穴が開いているわけでもない。
宵塚に向き直る。

「なんで？」

「人は常に前を向いて歩くべきだからさ」という教訓めいたことはまったく関係なくてね。もつと前をよく見てごらん。キミがさつき見たのは足元だよ」

言われて再度振り向く。

前をよくよく見る。

それはもう、眼球が飛び出しそうなぐらいに力を入れて、前を見ると 道があつた。

道上に、人がいる。

人がいる！

思わず全力で駆け出した！

時間にしておそらく一時間半くらい、その間で充分人がいない絶望を考えていたのだから、この感動はとんでもない！ 数値で表したらスカウターなんぞはじけ飛ぶだろう！

後ろで「元気がいいなあ、椎橋ちゃんは」と呆れ声を出す宵原のことなど気にもしない！

俺の足は結構速い。五〇メートル走は六秒台だ。運動部じゃない人間の中ではトップクラスだろう。

そんな俺だ。もう光の速さで走っているようにすら感じた。自ら風を切っていた。もれた自分の言葉さえ、既に俺の後ろにあるようを感じられた。

その人は女の子だった。見た目俺と同年代の、若々しい少女だった。それこそまるで創作物のような 繊細かつ優しい顔の作り。

花とか、人類の単語を連ねただけでは言い表せないような、そんな可愛さがあった。

体つきも年相応のもので（もつとも本当に俺と同年代かどうかはわからない）、グラマラスとは言えないまでも、そこそこに発達した胸部や腰つきはやはり女性を感じさせる。体の線が丸くて、色気と幼気が混ざっている雰囲気からか、こう、柔らかくて温かそうなイメージがある。

服装は なんというか、奇抜なもので、いかにも魔女がかぶつてそうな黒いとんがり帽子を頭に乗せて、妙に凝つたつくりの（縁色の紋章がいくつか印刷されている）黒いワンピースを着ていた。靴はタイツめいた黒いブーツだ。

むき出しになつた腕の先には黒い手袋をしている両手があった。右手には辞書みたいに分厚い本が、左手には彼女の等身大ほどの箇が持たれている。

とても魔女っぽい。

とにかく俺は興奮冷めやらぬままにスピードを落として、彼女の目の前に立つた。

彼女の目は開かれた分厚い本に落とされていて、彼女はどうやら俺に気づいていないらしい。

どうしたものか。

普通に声をかければよい気もするが、彼女から見たら俺は明らかに異端者だろう（パークーとジーパンである。恐ろしく雰囲気ぶち壊しだ）。

いやまあ、それでも正面から行くんだけど

「あ

間抜けな声を出したのは俺である。

いや、「容赦願いたい。俺の想像を上回る、とんでもないことが起きたのだ。声を出さなければ目の前の彼女にバレなかつたものを、しかし本当に間抜けな俺は声を出してしまったのだ。なんと責められようが、これはどうも避けられなかつたのだから、許してほしい。」

当然、間抜けな声を出すのも理由がある。

パンツが見えたのだ。

簡潔ならばいいとか、正直なら許されるとか、そういう問題ではないのは重々承知の上で、俺はもう一度言つ。

パンツが、見えました。

一陣の風　俺が走っていたときに巻き起こつた風よりもはるかに大きい、鋭い風が思い切り吹いた。俺の真後ろから　彼女の正面から、思い切り吹いたのである。

彼女の服装はワンピース。

風によって大きく巻き上げられたスカート部分は、彼女の身に着けているものの中でもっとも明るい色をしているのではないかと思えるものを、大胆にさらけ出すようにめくれ上がりつた。

いや確かに、さつきまで風は吹いていた。しかしそれ、きっと彼女は人がいないと思って油断していたのだろう。事実、道中にはいなかつた。

右手には本を持ち、左手には箒を持っていて、しかも彼女は意識を本に向けていたのである。

普段なら風が吹いたところでしつかりと抑えたのだろうが、その風が吹くことさえ、気にしていなかつたのだろう。スカート部分がめくれ上がつたところで、どうせ誰も見ていないのだろうから。

見てしまった。

明るい　まぶしさを^え感じる、真っ白を。

清楚な下着だつた。

正直に言つと、そこまで性的な興奮を覚えるような、そういう下着ではない。むしろ、守護の雰囲気を纏いに纏つた、厳かさえ感じられるような、そういう下着だ。

黒い服を着ている彼女が穿いている これがまた、白と黒の調和を生み出していた。一つの調べが生まれそうなほど、視覚的にそれが確認できそうなほど、スカートの布地と下着の布地は、見事に噛み合っていた。

目を離したくても、ひきつけられてしまう。彼女はそういう魔法でも使つたのだろうか そう思えるほど、俺の意識はそちらに引っ張られていく。

風はそう長々と吹かなかつた。突風にしては やはり一、三秒ほどだから長くはなかつたが、しかし、俺にとつては地球が生まれてから滅ぶまでの長い間、パンツを見ていることに終始していたよううにさえ感じられた。

その間、彼女は呆気に取られている。

視界の端に見える、呆然とした顔。ここに人がいたことに驚いているのか、それとも俺が彼女の下着を凝視していることに驚いているのか、俺には想像もつかない。

しかし、彼女のそんな表情を認識してさえ、俺は下着のほうにばかり目がいつていた。彼女自身の美しさや可愛さも、おそらく言語化できないだろうが この下着を合わせると、もう挙るべき対象なのではないか、彼女はすでに神の域にまで達しているのではないか、そう思つてしまつ。

「……………あ

スカート部分が元の位置に戻り、数秒が経つた。ようやくパンツから目を離すことができた俺は、当然彼女の顔を見る。
唖然としたまま。

真っ赤になつた。

体をわなわなと震わせて、しかし怒りや羞恥を飲み込むように深呼吸すると、俺のほうこござんすんと迫つてくる。その表情は鬼気迫るものがあった。あまりの迫力は、後ろに虎やら竜やらを従えまくり、百鬼夜行みたいな情景が田に浮かぶくらいのものだった。

凄い怖い。

顔が田の前にある。きっと彼女の田から見ても、俺の顔が田の前にあるのだろう。体は密着しそうな距離 もさじへ零距離である。

「…………ねえ」

「…………はい」

沈黙の後、彼女は鈴や風鈴よりも透き通つた、風情さえ感じじる声を俺にかけた。

ただどうしても、そこには怒氣や羞恥が見られてならない。

恥じる彼女もやはり可愛らしかつたが、いやいや、命の心配をしなくてはならない。怒りの彼女はとても恐ろしかつた。

「どうして、下着つてこんなにもガードが薄いのかしら。見られたくないれば、スカートじゃなくてズボンを穿かなればならないのか？」

「…………モ、ソソナコトオレーキカレマシテモ」

裏声が出てしまつた。

カタカナな発音である。

ところで、この世界にはスペツツといつものがないのだろうか。あの最終防衛壁、スペツツがこの世界にはないといつなのだろうか。宵原が嬉しい喜びそうである。

言つておぐが、俺の変態レベルなど知れたもので、眞の変態は宵

原である」ことをここに主張しておく。俺の変態力がスライム程度のものなら、彼の変体力は大魔王ゾーマ様に匹敵するぐらいの差があることを、しっかりと留意していただきたい。

俺は紳士である。

俺は、パンツの描写をおよそ千一百文字くらいでまとめるほど、良心的且つ紳士的な男だ。

宵原にやらせると凄いんだぜ？

パンチラ一つで埋まつた日記帳を、俺は見たことがある。

「見たよね？」

「見ました」

「……素直なら良いいって、思つてる?」

「……………いえ」

「じゃあ、しかるべき制裁は受けつもりなんだよね？」

「え」

「じゃあ？」

「じゃあ、しかるべき制裁を受けようと思つている」と、思われているんですか、俺は？

彼女は「onsoonso」と本を懐にしまつて、代わりに杖を取り出した杖？

なぜに、杖？

「あ

間抜けな声を出すも、もう遅い。

「全てを切り裂く風の刃よ、契約の元に顕現せよ、カインズフレード鎌鼬！」

おおお、なんか呪文っぽいものが唱えなれた！ しかもなんかめ

つちや痛そうな名前！

思わず目を閉じる 最後に見えた、振りかざされた杖、それに
灯っていた小さな光が、きっと魔力か何かなのだろう。

しかし、全てを切り裂くのか。凄いな。もしかして、石とか鉄と
かも簡単に切れるのかな？ まあ、風の勢いや水の勢いつて、とて
も強い威力らしいし、きっと俺の体なんてみじん切りにできるんだ
ろうな つて。

待てど暮らせど（実際には五秒も経っていないけど）、俺の体が
傷つく様子はまったくない。痛みも感じないし、

目を開いて見た。

「 ッ！」

眼前の光景におののく。
ウイングブレード
鎌鼬なる呪文の対象は、どうやら俺ではなく、彼女になってしま
つたらしい。

見えない刃 風が、彼女の服を、皮膚を切り裂いていく！ ワ
ンピースがどんどんボロボロになつていつて、先ほどと同じ純白を
したブラジャーが見えたりしていたが、紳士たる俺にとつてはどう
でもいい！

「どうすれば止まる！？

「……わ、私の魔力が死まるまで、止まらないっ！ 間違えたから
！」

間違えたからって、何を？

そんなことを問いただしている暇はない！

すでに足と腕に傷ができる、血が流れ始めるくらいなんだよ！

畜生、どうすれば止まる？ ウィンドウで音が鳴り、やつぱり風なんだろうが 風か。風を抑えることは……風除けを作れる？

それだ！

俺は紳士だ、俺は紳士だ、俺は紳士だ！

だけど、俺は、今は変態になる！

「じめんジ！」

「く？」

俺は思い切り。

目の前の彼女に抱きついた。

彼女のむき出しどなった足や腕を包み込むように、抱きついた。そしてそのまま押し倒すよつとする！

「え、え？　え……ええええええええつー…」

風に切り裂かれながらも絶叫する彼女。文字通り耳を切りそうな風音にも負けないくらいの大きな声が、彼女には出せる。その余裕がある。

彼女の風を、俺が引き受けているから。

風除けを作る すなわち、風が入る隙間もないくらい、彼女の体を覆えれば良い。

当然、彼女全体を覆えるわけじゃないが、何もしないよりマシだらう。

「あ、ちょ……じーをー、じーをーおおー……つて、い、い、いるのよ……つひやあつー？」

「まあ知らないばっしー！ なにせ俺は……変態だからなー！」

かつてここまで、自分が変態であることを格好よく認めた男がいただろ？か。少なくとも、あの宵原だって、ここまで変態的に格好つけたことはないだろ？

ふははは、体のあらぬところがムニムニで気持ちいいぜえ！

しかし 彼女の体を存分に味わっているにも関わらず、この風、空気読まずに痛い。凄いリアルな痛みだ。カッターで切り裂かれるような、鋭利な痛みを俺を襲う……が！

ふははは、パークーとジーパンつてのは、ワンピースよりは布地が硬いんだよ！

…………もちろん、痛いものは痛いけど。手とか顔とかは思い切り引き裂かれているけど。

そのまま、何分経つたのだろうか。

風が、前触れもなくぴたりと止んで、俺は彼女を解放した と、同時に、良い笑顔を浮かべた宵原が歩み寄ってくる。

「元気そうだね、椎橋ちゃん。そして、そちらのお嬢さんも」

畜生、コイツ、絶対タイミングを計つてたな！

ズタズタに裂けた少女のワンピースを舐めるようにして見る宵原に制裁パンチ（弱め）をさらにプレゼントし、うずくまつて悶える宵原に制裁キック（弱め）をさらにプレゼントする。

完全にノックアウトされた宵原（耐久力はスライム並みだな）を尻目に、俺は寝転がつたまま呆然としているワンピースの少女に手を差し出した。

無言で、彼女は俺の手を握る。
引き上げた。

スタッフと立つ。

「…………あ、ありがと」

「おひ。とこうかだ、あんな危ない魔法を俺にかけよつとしてたのか。しかるべき制裁つてか、重すぎるぜ」

「い、ごめんなさい……で、でも、見たのよね？ やつぱり、見たのよね？」

「ああ、見たよ。たつぶつ一千五百文字分。」馳走様でした」

「…………あは」

男らしく肯定したのに、なんかひどく落ち込まれた。…………やつぱり、女性つてのは下着を見られると落ち込むのだろうか。妹や幼馴染なんか、下着姿で家の中をうろついていたけど。全裸でいたこともあつたなあ。あはは、懐かしい話だ。つうん、わからぬ。

いつそ自分が乙女だつたならば…

と。

「…………ふう」

「お、おい？ なんかフラフワじやねえか？」

「そりや、魔力使いきつたもの。へロへロよ。じぱりくせ歩く」ともできないわ」

歩くこともできないつて。

しかし、彼女の腕や足から血は流れている。
仕方がない。

ダメージファッショニ変化した俺のズボンのひざから先を引きちぎる。応急処置的にぐるりと撒きつけて、抑えるよつて書つた、
その瞬間。

ガツクンと。
崩れ落ちた。

「つて、おい！？」

なんとか地面に叩きつけられる前に、抱きかかえる。あ、危ない。
これで頭でも打たれてたらとんでもないことになつてたぞ。
目は開いてるから、気絶はしないようだが 息は上がり、顔
が真っ赤だ。これはどう見ても、体調が悪いんだろう。俺の額と彼
女の額をくつづけてみる 熱はなさそうだが。しかし、顔の熱さ
とか色がハンパないことになつてるぞ。

同じくダメージバージョンになつたパークーのチャックを開けて、
彼女のダメージワンピースを隠すようにかける。幸いサイズが大き
いので、それは彼女のパンツまでしつかり覆つっていた。
ちなみに、俺は下にシャツを着ていたので問題なし。

本当、仕方ないな。

彼女を背負うように持ち替えて、転がつている杖と簫を宵原に捨
わせる（というより、率先して興味を示して拾つていた）。

パンツのせいだ、とんだ迷惑だ。

町か村が近くにないか、後ろの彼女に尋ねる。

当初の目的はたつたこれだけなのに、何でこんなにも痛い思いを
しなければならないのだろう。

「あるわよ。このまま道に沿つていけば、すぐにノーズノースナー
の町よ」

「なんて？」

「ノーズノースナーの町」

「ノーズノースナー？ なんじやそりや」

「町の名前はノーズノースノー！ わかりなさい、それくらい」

そう言われても、カタカナ横文字の町などは基本日本はない。
日本と言えば、どうして日本語が通じているのだろうか。今度訊いてみよう。

とにかく今の俺は、後ろでむにゅむにゅと蠢く温かい丸い怪物一
体に意識を向けないようにしてることに精一杯だから！

ああ、畜生、どうしても意識してしまいがちだぜ！ しかも俺は
シャツで、この子のワンピースは破れているから、温かさとか柔ら
かさがとてもよく伝わってくる。

「まかすよ！」、早足で歩き出した。

「やついえぱ キリの名前を聞いてないぜ、お嬢さん。せつかく
なので、名乗られる前に言っておくけれど、僕の名前は宵原良人。
よつちゃんとしても呼んで頂戴」

誰だよ、よつちゃんって。アンタをそんなふうに呼んでいる奴を
俺は見たことねーよ。

「よつちゃん、ねえ。覚えておくわ。ちなみに、私の名前はエリス・
エルメトラード。エリストって呼ばれることも多いけど、エルメと呼
ぶ人もいるわ。で、アンタは？」

それに対して、歩くたびに振動が伝わって、凄い気持ちいい。

…………はつ！

精神集中雑念よ全て消えよ今当たつているのは決して柔らかい胸
ではなくてただの杏仁豆腐だーん杏仁豆腐だつて言つんだつたら
もつ食べてしまいたいなこの杏仁豆腐凄い当たつて気持ちいいや
いやいやいや違うだろそつだ自制心を失つてはダメだ落ち着け落ち
着けせつかく身を張つて助けたのにまたあんな凄い魔法使われたら

どうするつていうかこの胸がもはや魔法みたいなもんだよなこの弾力凄すぎる女子の胸つてみんなこんなもんなのかなあああああああああああもう余計なことを考えるな前だけ見て歩け椎橋佑！

「アンタはつて訊いてるでしょー。」

ガクンガクン。

エリスが俺の肩をつかんで激しく揺らした。
うおお、それに合わせて胸が揺れて、当たる当たる。
つーか、元気じやん。

「椎橋佑」

俺の名前。

椎橋佑の名前を告げた。

「そう。……ねえ、コウ

俺の耳元で、エリスは妖艶に囁く。なんといつか、今まで一番色っぽさを感じるような囁き声だ。

幼げとか、見当違いも甚だしかったのかもしれない。
胸も大きいし、レディーに対して失礼だったか。

「ありがとつ

ふつと、俺の頬に温かい唇が触れた。柔らかくて、弾力のある、
俺の知らない材質でできたような唇が。

「どういたしまして」

俺は、火照った顔をエリスに見せないようにして、そう言った。

とりあえず、にやにや笑っていた宵原には制裁キック（強め）をお見舞いして、やっぱり早足で前に進む。

プロローグ（後書き）

どうも、初めまして。私、東雲八波と申します。

完全ファンタジーと一人称小説を書くのは初めてですので、不手
際が多々あるかもしれません、よろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0396z/>

勝手に飛んで異世界デイズ

2011年12月1日19時46分発行